

451471

教师阅览室

SINOLOGICAL RESEARCHES

中國學誌



第六本

一九七二年

東京

泰山文物社

刊行

中國學誌是爲得僑居海外的中國學人，便於發表有關中國文化論著而發行的共同園地。但也刊載日本學者的論著，以謀彼此學界的聯繫。

本誌暫定年出一本。

凡對中國之文學藝術、思想宗教、以及其他社會科學和自然科學，特別是民俗之學術性文章，均爲本誌所歡迎。

來稿可用中文或日文，並附英文題名。刊登稿件，各贈抽印本三十份。

關於本誌之一切函件，請寄交泰山文物社轉李編輯。

*

中國學誌 第六本

一九七二年十月出版

編輯者 李 猷 璋

發行者 東京新宿区若葉一―三
泰山文物社

代表者 楊 玲 秋

定價 日幣一四〇〇円

海外 \$ 7.00

K 207-54
6
841

451471

中國學誌 第六本 目次

玉壺山人の生涯 (2完)

— 清人第一の美人畫家

隋代總管府考

慶寛時代の長崎唐人をめぐる諸問題 (下)

第六、鎖國の唐人に對する影響

第七、唐船改めと唐船

キリシタン事件

第八、唐通事體制の成立

第九、唐

人船宿の盛衰と内通事

論晚明東林顧憲成與高攀龍之儒學

潮州人の人生過程儀禮

〔雜組〕 吉岡某の本誌道教專號評に答える



贈

神	嚴	李	唐	李
田喜一郎……一	耕	獻	君	毅……一四
望……三五	璋……三五	璋……一六	璋……一六	者……二〇三



90038601

玉壺山人の生涯（2完）

——清朝第一の美人畫家——

神田喜一郎

七

山人がはじめて華亭の沈氏の知遇を得たのは、その二十六、七歳の時のことであつたと思ふ。それ以前の行跡については殆ど何も傳はるところがない。ところがここに一つだけ注意しておかねばならない記事がある。それは『墨林今話』に見える山人の小傳に、

幼通敏。詩畫皆天授。滄州李味莊先生備兵滬上。平遠山房壇坫之盛。海內所推。七鄰時甫踰冠。受知最深。而聲譽日起。

とある一節である。山人が幼にして通敏、詩も畫も俱に天授であつたといふのは、おそらく事實であらう。王鐵夫に師事したのは、鐵夫が華亭に來てからのことで、そのころ、山人はすでに二十歳を過ぎてゐたから、そこまではよいのであるが、そのあとの記事に問題があるのである。

いふところの滄州の李味莊とは、嘉慶元年、上海に蘇松太道として來任した人物である。名は廷敬、字は景淑、一つに寧圃とも號した。直隸省滄州の人、乾隆四十年の進士である。翰林院庶吉士から累進して、常州・江寧・松江・蘇州、

等の各地の知府を歴任した後、蘇松太道に擢んでられて上海に來任したのである。その傳記は、清末民初の名士徐世昌の編纂した『大清畿輔先哲傳』卷二十五に見えてゐるが、その中に「性、豁達にして客を好み、能く物を容れ、題襟投轄、従ふ者雲の如く」であつたと傳へてゐる。いま題襟投轄の故事をここに説くことは姑く措く。ともかくその爲人が豁達で、客を好んだことは大變なものだつたらしい。いったい李味莊の任ぜられた蘇松太道といふのは、正しくは分巡蘇松太道兵備といひ、一般にはその上海に常駐することになつてゐたところから上海道臺といはれた大官である。もともと分巡道と兵備道との二つの官を兼ねたもので、分巡道としては江蘇省の蘇州府・松江府・太倉州の二府一州の一般行政事務を管轄し、兵備道としては以上の地方の安寧秩序を維持すると共に、必要に應じては時に軍隊に命令したり指揮したりすることもできる權能を與へられてゐた。したがつてその勢威の熾なことはいふまでもなく、しかもその管轄する二府一州が中國第一の富饒な土地であつただけに、その收入も實に莫大なものがあつた。李味莊はその莫大な收入を舉げて上海に別業南園を營み、そこに設けられた平遠山房に多くの文人墨客を招き、いつも豪奢な詩酒の譙を催して、江南の一角に壇坫の盛を誇つたのであつた。丁度そのころは清朝文化の爛熟期で、殊に人文の淵藪といはれた江南の地では、各地の大官がその幕中に多くの學者や文人墨客をあつめて、おのおのその盛を競ひあつてゐた。中でも揚州に兩淮鹽運使として在任した曾賓谷（煥）の題襟館とか、杭州に浙江巡撫として在任した阮芸臺（元）の訖經精舍などは、皆それぞれに特色を發揮して名を馳せてゐたが、李味莊の平遠山房もそれらに較べて必ずしも劣るものではなかつたらしい。『墨林今話』に「平遠山房が壇坫の盛なるは海内の推すところ」といつてゐるのは、すなはちその事實を述べたものにほかならないと思ふ。山人もその幕客の一人として招かれたのである。

ところで『墨林今話』の記事に據ると、山人が平遠山房の幕客として招かれたのは、「時に甫めて冠を踰ゆ」とあつて、その漸く二十歳を過ぎたばかりの時のことゝ解しなくてはならない。然しこれはどう考へてみてもおかしい。山人

が郷里の華亭において沈氏一家の庇護を受けるに至ったのは、わたくしの推定するところでは、その二十七、八歳の時のことである。さうしてそれ以前に、山人が郷里の華亭を離れて上海に赴いたやうな形迹はまったく認められないのである。それにもっと辻褄の合はないことがある。李味莊が蘇松太道に任ぜられたのは、嘉慶の『上海縣志』の歴官表を調べてみると、嘉慶元年となつてゐる。これはむろん官府の記録に據つたもので、確かな事實に相違ないが、いま假りに李味莊が蘇松太道に任ぜられて早々すぐに山人を招いたとしても、時に山人は二十四歳になつてゐた筈である。それを「時に甫めて冠を蹴ゆ」とはいへまい。あたり前ならば『墨林今話』のこの一條は、何かの誤となくてはならないところである。然し『墨林今話』の記事は、この文章の最初に指摘しておいた通り、もともと信憑性に富むもので、さう簡單には誤として棄ててしまふわけにはゆかない。このデイレンマをどう解決するか、わたくしが久しく困んだことはいふまでもない。

然るにこのごろになつて、偶々嘉慶の『松江府志』の職官表を翻してみると、乾隆五十六年、李味莊が松江府の知府に任ぜられ、同五十八年まで在任したことをしるし、そこに同五十七年からは蘇松太道を兼攝したと註してゐるではないか。山人がはじめて李味莊に見出されたのは、決つとその時のことに相違ない。わたくしはさう直感したのである。當時の李味莊は、蘇松太道といつても、實は松江知府が本官であつたので、むろん松江府城に常駐してゐたのであらうから、その李味莊が何かのふとした機會に、おなじ松江府城の一部である華亭縣内に住む無名の青年畫家を知つたと考へても、さう不自然なことではあるまい。さうしてそれが乾隆五十七年であつたとすれば山人は時に二十歳、翌五十八年であつたとすれば二十一歳であつたことになる。それならば『墨林今話』の記事もよくわかる。つまり『墨林今話』は、前後十年も隔てた事實を、あたかも一時のことのごとくに書いたのである。當時の人としてはそれによくわかつたのであらうが、今日となると大變にわかり難い。文章は簡潔なるを尙ふとはいへ、かう書かれてあつて

は、それを誤解するのがむしろ當然ではあるまいかと思ふ。然しわたくしとしては、多年の疑問が纏れた糸の自然にほぐれてくるやうに解決したのを、獨り手を拍って喜んだ。さうしていまのやうに解釋すると、李味莊が後年になって山人を平遠山房の幕客として招いたことも、決して唐突ではなく、さうした素地のすでに出来てゐたことがよくわかるのである。ひよっとすると、華亭の沈氏が山人を招いたのも、王鐵夫の推輓があっただけではなく、李味莊知府によつて山人の畫才が認められ、その聲譽の日々に高くなつてゐたことも、一つの大きな原因であつたのかも知れない。

八

山人が李味莊に招かれて上海に出たのは、嘉慶八年、すなはち山人の三十歳のときであつた。洪北江の『更生齋詩』卷八に、

初四日。消寒第五集。李明經筠嘉招同李兵備廷敬・何徵君琪・陸孝廉繼輅・林鎬・儲桂榮・褚華・李學璜・鮑照・改琦・徐黨諸文學。竝鐵舟上人。吾園小集。余以明日旋里。諸公皆即席賦詩相餞。醉後率答一篇。卽以留別。といふ題を附した長古一篇の見えるのが證據である。この中に山人と李味莊の名の出で決るのを、まづ最初に注意しておきたい。

北江といふのは、名を亮吉、字を稚存といった名高い文人である。江蘇陽湖の人。乾隆五十五年の進士。夙くから文名が高く、詩では黃仲則（景仁）と併稱せられ、駢文では汪容甫（中）と雁行した。その上に學者としても『春秋左傳詁』や『十六國疆域志』などの著があり、特に地理の學に精しかった。然るに嘉慶四年、たまたま事をもつて罪を獲、遠く西陲伊犁に謫せられるといふ不慮の災難に遭つた。さうしてそれが大きなショックとなつたのか、翌年釋放

せられはしたが、その後は郷里の陽湖に歸臥し、まったく優遊自適の生活に入ってしまった。それを客好きの李味莊が上海によく招待したらしい。北江の門人呂培の編纂した年譜を見ると、嘉慶六年十月の條に「松太道李觀察廷敬邀游吳淞江」とあるのを初見とし、爾後數回に亘つておなじやうな記事があるが、嘉慶八年十二月の條に「復遊上海。偕李觀察及幕中諸客爲消寒會。旬日返里。」とあるのが、すなはちいまわたくしの引いた「初四日。消寒爲第五集。」云々とある詩題に相當することは殆ど疑を容れない。さうすると詩題の「初四日」といふのは、嘉慶八年十二月四日のことになる。さうして山人は、その日李味莊の幕客の一人として、いはゆる消寒會に確かに出席してゐるのである。管見の及ぶ限りいまの詩題は山人のかうした行動に關する最初の記録で、わたくしが山人の上海に出たのをもつて嘉慶八年と推する所以にほかならない。

もっともいまの詩題に據ると、この日の消寒會の主催者は李明經筠嘉といふことになってゐる。この李筠嘉といふのは、當時における上海きつての富豪で、同治の『上海縣志』の人物傳に小傳が見えてゐる。字を脩林、號を荀香といひ、文雅の志に篤かつたので、李味莊とは極く懇意にしてゐたらしい。當時の名高い詩人の陳碧城(文述)・郭頻伽(慶)・孫子瀟(原湘)などの集にも、よく李荀香とか李光祿の名で出て来る。李光祿といふのは、荀香が光祿寺典簿になつてゐたからであるが、その明經の資格をもつてゐたのとともに、これはむろんいはゆる捐納によつて得てゐた虚衡に過ぎなからうと思ふ。ところでこの李荀香の營んだ別業がすなはち吾園で、當時上海第一といはれた名園であつた。したがつて李味莊もときどきここを借つて盛饌を催すことがあつたらしい、この日の消寒會もおそらく李荀香が味莊の意を承けて主催したものであつたと思ふ。

消寒會といふのは、當時文人の間に流行した一種の雅遊である。もともと禹域には九九消寒圖をつくるといふ民俗的な風習があつて、そこから起つたものであるといはれてゐる。九九消寒圖のことは、ドイツの支那學者グルーベ

(Wilhelm Grube) が一九一一年にベルリンで上梓した“Zur Pekinger Volkskunde”の中に消寒圖の實物を挿入して委しく説明してゐるが、それをまたフランスの支那學者シヤパンヌ (Edouard Chavannes) が細かく批評した“Les neuf neuvains de la diminution du froid”と題する一文を書つてゐる。一九〇四年の“Bulletin de l'Ecole Française d' Extrême-Orient” tome IV に載つてゐる。その二つの文獻を見ると、九九消寒圖のことがよくわかる。冬至の日に素梅一枝の圖を描き、その枝にあらかじめ八十一の花辨をつけておく。さうして冬至の日から毎日その一辨づつを彩色してゆくのであるが、最後の日になると、はじめて冬の寒さが消えて春の暖い風が吹いて來るといふのである。これがいはいゆる九九消寒圖で、九九消寒會、或は略して消寒會といふのは、すなはちそれに名をかつた文人達の雅遊にはかならない。むろんこの消寒會は、實際に九九八十一回も續いて行ふことは滅多にないが、それでも幾回かは試みたもので、いまの洪北江の詩題に「第五集」とあるのも、おのづから首肯されよう。

來會者は、主賓の洪北江をはじめ、李味莊、およびその率いる幕客何琪以下十人であつた。主人の李筍香を併すと、主客すべて十三人、ずいぶん賑かなことであつたと思ふ。殊にこの中、陸繼輅・林鎬・鐵舟上人の三人は、いつもかうした會には無くてはならぬ花形であつたが、それが皆揃つて出席してゐるのであるから、大抵は想像がつく。

陸繼輅、字は祁生、別に祁孫ともいった。江蘇常州の人。詩文俱に優れてゐた上、填詞や曲までも善くし、それに酒も相當なもので、少し酔がまはると、樂工の奏する琵琶にあはせて、大小かずかずの水晶珠を巧みに兩手で風船玉のやうに上に揚げては受け、受けては揚げるといふ一種の曲藝までも演じ、それがまた甚だ得意であつた。孫子瀟にその妙技をおもしろく叙した「擊珠曲」と題する長い七古の作があつて、現に子瀟の『天真閣集』卷十五に見えてゐる。

嘉慶七年、友人の萬承紀の推薦で李味莊の幕中に入つたものらしい。時に二十九歳であつた。その傳記としては李申耆（兆洛）の書いた墓志銘があるが、わたくしは彼れみづから書いた母親の年譜によつて、その事實を知つたのであ

る。著に『崇百藥齋文集』初集二十卷、續集四卷、三集十二卷、計四十六卷があり、その年譜は「先太孺人年譜」と題して初集の卷二十に見えてゐることを記しておく。

林鎬、號を遠峰、または雙樹生といった。福建龍巖の人。若いころ蘇州に居て袁隨園（枚）に詩を學んだが、やがて各地を放浪しあるいてゐる中、李味莊に見出されたのであるといふ。孫子瀟の書いた『雙樹生詩草』の序に「性、豪飲にして聲色を好み、清吟高唱、多く倡樓酒肆の間に出づ。」とあって、そこに傳へられるいろいろの逸事を讀むと、あたかも清初の『虞初新志』や『板橋雜記』の中から抜け出して來たやうな人物であつたと想像せられる。

鐵舟上人、名は可韻、また木石山人とも號した。もともと湖北武昌の名家の子弟であつたが、風流三昧の生活に耽つた揚句の果に畫僧となつたものらしい。然しそれだけにどこか鷹揚に出來てゐて、特に竹石花卉を畫くのが工みであつたが、書法にもすぐれ、また善く琴を鼓したといふ。さうして潤筆が入ると、すぐ氣前よく散じ、或は貧士に頌つたとあつて『墨林今話』卷七に見える小傳などは、甚だ好意をもつた書き方をしてゐる。

李味莊のところにあつまつた幕客には、大體こんな型の人物が多かつたやうである。爾餘の諸家についても續いて述べるべきであるが、それよりもわたくしは、ここでその日の會の行はれた吾園のことを少しばかり説明しておきたいと思ふ。山人の畫業とも關係があるからである。

九

吾園は前にも一言しておいた通り上海第一の名園であつた。もともと廣大な桃園もろぼなちであつたのを買ひもとめて別莊としたもので、何百本何千本とも知れぬ桃の樹が林をなし、その間に帶鋤仙館・紅雨樓・瀟瀟臨溪屋・清氣軒・綠波池・上鶴巢などの名勝があり、上鶴巢には鶴が二羽飼つてあつた。さうしてこの鶴がまた一つの名物となつてゐた。

これは嘉慶の『上海縣志』の「第宅園林」の條にしるすところによつて、然し今日に於て吾園の盛觀を想像するには、當時ここに遊んだ詩人の作品を讀むのがもつともよいであらう。

まづ詩人陳碧城の五律四首を錄してみる。『頤道堂詩外集』卷三の載するところである。

過吾園。贈李筍香。

淥水廻芳嶼。紅闌影畫橋。桐陰前夜雨。松韻午時潮。

殘墨書團扇。微波感玉簫。碧雲遲日暮。閒殺木蘭橋。」

東屯少陵屋。西蜀子雲居。結伴可招隱。得閒宜著書。

長吟邀舞鶴。點筆數行魚。面面臨流好。樊川水樹虛。」

竹外亂紅浮。種桃成一洲。林間新綠徑。花外小紅樓。

芳樹留春色。殘英動客愁。凭欄吟落日。乳燕在簾鉤。」

主人能好事。佳客亦頻來。岸幘攤詩卷。題襟付酒杯。

評花開小閣。醉月上高臺。春雪新編在。題詩寄別裁。
筍香刻投贈諸作。爲春雪集。

この詩人の作としては決して佳什とはいへないが、それでもこれを試みに誦してみると、第三首の

竹外 亂紅浮び 桃を種えて一洲を成す

林間 新緑の徑 花外 小紅樓

芳樹 春色を留め 殘英 客愁を動かす

闌に凭りて落日に吟ずれば 乳燕 簾鉤に在り

など、まさに一幅の美しい小品畫である。竹外とか花外とかおなじやうな字面を短い五律の中に重複して使用してゐる

る瑕瑾も忘れて、吾園の景色が眼前に浮んで来る。やはり名家の作品といふべきであらうか。

陳碧城にはまた左のごとき六言絶句四首もある。同集卷五に見えてゐる。

題李筍香紅雨樓圖

一院春雲抱檻。四圍環水通舟。是我舊曾遊處。萬桃花裏紅樓。」

翠鳥靜窺書幌。白鶴閒傍琴臺。更有一雙仙鶴。慣看花落花開。」

竹裏明妝笑淺。酒邊微語香溫。每到桃花時節。憶他桃葉桃根。」

索句雲藍袖滿。題詩杏子衫彈。更乞丹青著意。綠波池上闌干。」

これに據つて想像すると、吾園の名勝紅雨樓は、綠波池の環る美しい嶋しまの中にあつて舟に棹して行くことはなつてゐたらしい。嶋につくと、そこには桃の樹の林が樓を取圍んでゐて、その間に翠竹の小徑が通じてゐる。さうして樓の前庭には、一雙の仙鶴が放つてある。まあこんなことであらうか。紅雨樓の名は、むろん唐の詩人李長吉の名吟「將進酒」の中「桃花亂落如紅雨」の句から來てゐる。桃花満開の候ともなると、まったく李長吉の句そのままの光景を現出したに相違ない。

その桃花満開の候の光景を叙したものに、詩人孫子瀟の左のごとき七古一篇があり、『天真閣集』卷二十一に見えてゐる。因みに孫子瀟は名を原湘といひ、別に心青と號した相當な大家である。江蘇昭文の人。李味莊の幕客の一人であつた。なほ夫人を席道華（佩蘭）といつたが、袁隋園の女弟子で、當時夫妻揃つて詩名が高かつた。

寄題李筍香光祿紅雨樓

吾園一園如兩園。後爲竹塢前桃園。花時春情紅欲滴。綠受紅欺瘦難敵。花底看花眩兩眸。看須置身花上頭。花上頭。花光浮。主人特爲花造樓。樓窗玻璃紅扇扇。豔影燒空射人面。一面花枝一態呈。四面窗開看不厭。催花不用羯

鼓搥。住兒妙手能琵琶。一彈迴豔雪。再彈升嬌霞。客來看花不識路。遙指霞明卽花處。隔花已見花影招。入花翻被花叢誤。俯水水不碧。仰天天失青。萬樹紅珊瑚。花海春冥冥。忽聞人聲出花頂。一樓春人弄春影。邀客登樓共賦詩。詩情久在花梢等。春風吟顚與酒顚。夕陽花顏映醉顏。詩篇縱橫酒狼藉。明日闌干寢無迹。樓下落紅深一尺。すべて三十四句、十解から成っているが、一氣貫注、さすがに才人の筆で、詩中の「春情紅欲滴」の五字は、そのまま移してこの詩の評語として差支ないと思ふ。

美しい一面の花の海と化した吾園は、豪華絢爛、さながらこの世の天國であつた。「花の底したにて花を看れば兩つふたの眸も眩する」ばかりで、「看るには須らく身を花の上頭うへに置くべし」とあつて、「主人は特に花のために樓を造」つたのであつた。これがいふまでもなく紅雨樓である。その四面に開かれた玻璃の窓には、それに映えうつる花の「豔影は空を焼こがして人面を射る」有様である。「水に俯するも、水、碧ならず、天を仰ぐも、天、青を失ふ。」實に上下四面ことごとく是れ花一色である。昔、唐の玄宗皇帝は、春なほ淺い二月のはじめ、上苑に遊んだところ、花の未だ開くに至つてゐないのに業腹を立てて、近侍の高力士に命じて羯鼓を撃たせ、一時に柳や杏の花を咲かせたといふ名高い故事があるが、いまはそんなことを敢てする必要もなく、桃花はいやがうへにもいまを盛りと咲き誇つてゐる。さうして紅雨樓の上では、多くの美妓たちがおのおの祕術をつくして琵琶をかきならし、その妙曲は「一彈しては豔雪を迴めぐらし、再彈しては嬌霞を升らしむ」るばかりである。あまりの花また花に路を迷ひながら訪ねてくる客人も少くない。それらの客人は樓上に導かれるが、「春風は吟顚と酒顚」を吹き、「夕陽に花顔は醉顏に映じて」、「詩篇は縱横、酒は狼藉」と、まったく歡樂の限をつくしてゐる。翌朝になつて樓下を見ると、何と「落紅深きこと一尺」ではないか。これがこの詩の大意である。

もっともこの詩は「寄題」とあつて、その詠ずるところのすべてがそのまま事實とはいへないかも知れないが、然し

孫子瀟がこの詩を作ったのは、『天真閣集』に據ると、甲戌、すなはち嘉慶十九年となつてゐて、孫子瀟はそれよりも前に吾園にしばしば招かれてゐるし、その實際を知悉してゐた筈である。多少の誇張はあるにしても、大體はこの詩の詠ずる通りであつたに相違ない。但だ惜しいことに山人の出席した九九消寒會は、臘月四日といふ嚴冬の最中に催されたので、むしろかうした盛況は見られなかったが、それでも主客歡をつくして大賑ひであつた。當日の主賓洪北江の詩を見てみよう。

十

洪北江の詩にいふ

一鶴引一鶴。閑歩汀西頭。汀西閣上人。一一如眠鷗。元裳丹頂時窺牖。野鶴居然戀紅袖。有時合隊出探梅。七尺亭亭影俱瘦。簾前新月輝。簾外疎梅開。春人結束登春臺。鼓吹復從門外來。主人約客排宵讌。落日暉暉坐中見。陸郎年少飲亦豪。十七人中稱最健。香巖儲高詠竹園鮑歌。激得閣外生回波。就中匿笑何春渚。七十風懷尙能補。坐中有歌者四人。解衣作畫改七薌。我亦石上題賸忙。鐵舟開士詩才逸。畫筆年來亦如鐵。謫仙開衙東海頭。好客絕似劉荆州。穀人詞老梅村叟。前後可稱雙祭酒。時遲見祭酒錫麒。以病不至。微嫌病酒及十旬。明歲花開可來否。一更飛觴至三更。坐上客始連翩行。冥濛歸路不知數。幸有導騎持燈迎。君不見新知雜故知。卜晝又卜夜。三更未醒船已行。掛席當從蠡河卸。

すべて三十八句、十二解から成つてゐる。これを讀むと、さながら身みづからその夜の會に列する想がする。山人の姿も眼前に浮んでくる。

來會者一同は、一人一人ひとりひとり鶴に導かれて汀西の閣に入つた。汀西の閣といふのは紅雨樓のことに相違ない。おしつま

った師走月のことで、むろん桃花の亂れ飛ぶ風趣は無いが、然しその代りに早くも咲きそめた臘梅が、折りから昇ってきた新月の光に映えて、いかにも艶やかである。いよいよ來會者一同が席に着くと、門外から樂隊が入ってきて、庭で賑かに演奏をはじめ。『鼓吹復從門外來』といふのがそれである。もう和氣藹々として『春人結束して春臺に登る』感がある。主人は夜を徹して飲まふといふ。盛りあがってきた雰圍氣がしのばれる。さすがに洪北江の筆である。しかも巧く老子の『登春臺』の句を用ゐて形容してゐるところなど、手腕の程に感服せずには居られない。

このあと洪北江は、來會者の一人一人についてその夜の様子をおもしろく詠じてゐるのであるが、特にその前後に主人の李筍香とそれに李味莊を配してゐるのが注意を牽く。詩として體を得たものといふべきであらう。『謫仙、衙を開く東海の東。客を好むは絶だ劉荊州に似たり。』李味莊を李太白に擬したのは、むろんおなじ李姓であるのを巧く利かしたのであるが、然し味莊はまたそれに値するだけの大酒豪だったらしい。但だその夜北江にとって残念でならなかったのは、吳穀人祭酒が病氣のために來なかつたことである。穀人、名は錫麒、字は聖徵、浙江錢塘の人。李味莊とは同年の進士で、官に仕へて國子監祭酒にまでなつたが、昨年の夏退休して故山に歸臥してゐたのを味莊に招かれ、このころは味莊の別業南園の一角に起居してゐた。詩と駢文に優れ、填詞にも巧みで、當時の文壇の重鎮であつた。洪北江がこの詩に、その吳姓と祭酒とに引かけて、名高い吳梅村に擬してゐるのも、決して不倫とはいへまい。それに穀人も北江も俱に乾隆十一年の生れで、年齒もおなじかつたから、何かにつけて話が合つたに相違なく、それだけにその夜北江が特に穀人の來會を期待してゐたことは想像できる。いまの詩の最後のところで、北江が、明年花の開く時節を待って、もう一度訪ねて來るから、そのときには夜おそく一更どころか二更に至るまでも互に觴を心ゆくまで飛ばさうではないか、と歌つてゐるのは、おそらく眞情であつたと思ふ。

然しさうした淋さも、開宴中はすっかり何處かへ吹き飛ばされてゐたらしい。洪北江は更につづけて歌ふ。主客一

同十二分の歡をつくして、さて歸らうとすると、酔って路もわからぬままに、騎馬の先導が手に提燈を携へて迎へに來てくれ、その案内で漸く三更のころはい碼頭にまで着いたが、酒は未だ醒めやらず、かねて豫定してゐた船はすでに出てしまつてゐたので、己むなく蠡河經由で歸途につかねばならない始末になつた。これで北江の詩は終るのであるが、その夜の情景があたかも映畫の展開してゆくがごとくに逐一描き出されてゐる。

ところでわたくしは、洪北江が折角その夜の來會者の一人一人についてその様子を詠じてゐるのを、故意と略しておいたが、ここで取上げてみたいと思ふ。「陸郎は年少にして飲むもまた豪なり。十七人中、最も健なりと稱す。」陸祁生の酒豪であつたことがよくわかる。十七人といふのは、前に舉げた十三人に、いまこの詩の自注に歌者四人とあるのを併せていたのであらう。その中の最少年とあるが、祁生は時に三十一歳であつた筈で、若いといふ點では、山人の三十歳が實は第一ではなかつたかと思ふ。「香巖は高詠し竹圃は歌ふ。激し得て閨外に廻波を生ず。」儲桂榮、字は香巖、鮑照、字は竹圃。この二人は歌が得意だつたらしい。その美聲は緣波池の波を向ふにはね返すほどであつたといふ。いちばん老人の何琪、字を春渚といつたが、さすがに若い者とは違つて、さう燥^{はしや}ぎはしてゐないが、四人の歌妓を傍にして、にやにやと満更でもなさうな顔をしてゐる。山人はと見ると、「解衣畫を作る」とある。「解衣」といふのは莊子の田子方篇に出てゐる言葉で、それには「解衣槃礴」とつづいて用ゐられてゐるが、昔、宋の元君が一畫工の衣を解いて兩足をなげ出し裸になつてゐる姿を見つけ、これこそ眞の畫工であると賞讃した、といふ話を載せてゐる。その畫工の姿がすなはち「解衣槃礴」で、いま洪北江がその言葉をここに用ゐたのは、山人をもつて眞の畫工と許したものとみてよいであらう。山人にとっては、おそらく千金にも換へ難い嬉しい讃辭であつたに相違ない。さうしてこれがまた山人の畫名を天下に高からしめたことはいふまでもなからう。洪北江みづからは「石上で詩箋に題するに忙しく、鐵舟上人はこれまた詩や畫をつくるのに餘念なかつたらしい。

以上が山人のはじめて李味莊に招かれて出席した宴會の模様である。華亭の沈氏のそれとはまた違って、一層豪華を極めたものであった。山人は上海に來たのを喜んだことであらう。

十一

李味莊は芝居が好きで、彼みづからも歌曲をつくり、小伶に歌はしたりして、つねに愉しんでゐたらしい。『大清畿輔先哲傳』の傳へるところである。詩人の王仲瞿(曇)も「凡宋詞之不諧宮商者。公被以管絃。」といつてゐる。『煙霞萬古樓詩選』卷下に見える「奉上海李味莊觀察」と題した七律三首の中の「元白新箋繙樂府。辛蘇小令課官奴。」の句の下に附せられた仲瞿の自注の言葉である。さうした味莊の趣味から、酒宴の席上優伶を招んで芝居を演ぜしめることも稀ではなかつたと思はれるのであるが、ここに山人と關聯して、その事實を傳へるものに、詩人舒鐵雲の左のとぎ七古一篇がある。

李味莊備兵。宴客嘉隆堂。歌者孔福方演雜劇中之花魁娘子。督有羅浮大蝶飛至。繞伶身三匝而去。祁生孝廉作仙蝶謠。而玉壺山人七香改琦爲圖。來索題句。蓋爲祁生作也。

東海桃花紅雨霽。南海仙人放蝴蝶。水精簾下讀道書。屋裏衣香花不如。花非花兮花解語。細漏丁冬碧紗雨。定子當筵車子喉。消息劇於十五女。相逢不是青陵臺。且占百花頭上開。花開花落凝絲竹。絲竹分明不如肉。海水汨汨山冥冥。有人讀破南華經。造得酒樓邀李白。傳來綵筆付秦青。牽雲曳斑駁。送。殺粉調鉛寫春夢。不知鳳子爲誰來。還問翠釵釵上鳳。

この詩の作者舒鐵雲は、名を位、字を立人といつて、例の孫子瀟などと竝んで嘉道六家の一人に算へられる優れた詩人である。直隸大興の人。著に『瓶水齋詩集』十七卷、おなじく『別集』二卷がある。この詩はその卷十二に見えてゐる。